

次の文章を読み、設問に答えなさい。

赤松が見えた。見た瞬間、ぼくは軽い狼狽を覚えた。記憶のなかの赤松とくらべると現実の赤松がいやに雑然としていたからだ。前は秋風の立つごとに植木職人がやってきて、赤松の姿づくりに半日はかけていた。その丹念な葉刈りのおかげで赤松はいつもすっきりした姿で立っていた。だが、(一)すこしずつ近づいてくる三年ぶりの赤松は、小枝を四方へ漫然と伸ばしているだけで、かつてのりりしさには欠けていた。

5 店先に浴衣を着た若い男が正坐して、膝の上に置いた本の上に目を落としている。

「あ、叔父さん……」ぼくが小さくきんだのが聞こえたようだ。叔父が顔をあげた。薄暗い店の中に叔父の白っぽい浴衣と蒼白い顔がくつきりとかび上がつて見える。

「厄介になります」ぼくは店の中にトランクをさし入れるように置き、叔父に軽く会釈した。弟もぼくをまねてお辞儀をした。

「……やあ」叔父はかすかに笑ったようだが、すぐに目を膝の上の本へもどした。

10 「昨日、ぼつちやからもらったんです」ぼくはシャツのポケットからふたつに折った封筒をぬき出して、叔父の眼の前にかかげた。シャツの生地を透かしてしみ出した汗で封筒は湿っぽくなっていた。表書きのインクが汗でにじんでいる。

「……とにかく帰っておいでって書いてあったものだから、今朝早く孤児院を發つてきたんです」

叔父はしばらく封筒を見つめていた。見つめていたというよりにらみつけていたといった方がいいかも知れない。ぼくは氣おされてのろのろした仕草で封筒を胸におさめた。

15 「叔父ちゃ、ぼつちやは？」

「裏じゃないかな。畑にいるだろう」はじめて叔父は声らしい声を発し、言葉らしい言葉をしゃべった。ぼくはそれがうれしくてほっとした。店の中に入りながらぼくはきいた。

「叔父さんも夏休みですか」

(二)三年前ぼくらが町を出るすこし前、叔父は東京の私大に入学した。順調に行っているならもう四年のはずだった。

20 「……来年は卒業でしょう」

「大学は二年でやめたよ」はき捨てるような口調だった。弟はびくりとしてぼくのうしろにかくれた。叔父は再び膝の上の本に目を落とし、大きな音をさせてページをめくった。

「畑へ行ってみます」ぼくと弟は足音を殺して横の通用門へ歩きだした。

「店先に荷物を置かれちゃ困るな」本をにらんだままで叔父が言った。ぼくはすみませんを何回も連発しながら、トランクとボス

25 トンバッグを両手にさげて通用門へまわった。

門をくぐりぬけると庭になる。庭に向かい合つて長い縁側がのびている。その縁側に荷物を置くと、ぼくらは裏へ走り出た。

畑はあれ果てていた。雑草だけがはびこっている。ただ、敷地の中を流れる小川に沿って、トマトの赤やなすのむらさきやさやえんどうやきゅうりの緑が見えていた。ぱちんぱちんとはさみを使う音がそのあたりでしていた。

「……ぼつちや！」ぼくらがさげふと、はさみの音がやんだ。

30 「どこ？」トマトの植えてあるあたりで白いものが動いた。ぼくと弟はそこを目がけて走っていった。

「ぼつちや、来たよ」

「おお、来たか」叔父と同じように白っぽい浴衣を着た祖母がたすきを外しながら何度もうなずいている。足もとに置いたかこの中に大つぶのトマトが光っていた。

「よく来たねえ」

35 「お金、ありがとう」

「足りなかったらう、あれつぼつちや……」

「二千円そっくり残ってる」ぼくは胸のポケットを左手でおさえてみせた。

「交通費は孤児院の先生からもらったんだ」

「ありがたい先生方だねえ」小虫が眼に入つたと言いつつながら祖母はたもとで眼鏡をそっとぬぐった。

40 「ぼつちや、来る途中に洋品屋があつたけど、あれはぼつちやの家だよ」

「おまえたちが町を出ていったころだと思っけど、じつちやが死んでねえ」

そのことはぼくも知っていた。葬式へ行くというぼくと、葬式になど出る必要がないと言いつつ張る母との間でけんかになってしまったものだ。結局、ぼくが言い負かされて葬式には出ないでしまったが。

「……じつちやが死んでから、うちにだいたい借金があつたことがわかったのだよ。それで店を半分、人手にわたしたわけ……」祖母はぼんぼんと浴衣の前を手でたたいた。

45 ぼくと弟は祖母のあとについて家の方へ歩きだした。日はだいたい西にかたむいていた。雑草の上をすずしい風がわたってくる。祖母の髪が四、五本はらはらと風にそよいだ。後から見ると祖母はずいぶん小さく見えた。

(三)縁側に腰を下ろし、足をぶらぶらさせながらぼくと弟はいろんな音を聞いていた。軒にゆれる風鈴のかれんな音色、ときおり通りぬけて行く夕風にさやさやと鳴る松の枝、台所で祖母の使う包丁の音、それから、赤松の幹にしがみついても悲しくなくカナカナ。

弟は庭下駄をつつかけて赤松の方へそと近づいて行く。彼は昆虫をつかまえるのが好きなのだ。

(……いまごろ孤児院ではなにをしているだろう) ぼくは縁側の板の間に寝そべってひじまくらをついた。

(……六時。お聖堂で夕べの祈りを行っているころだな。お祈りは六時二十五分まで、六時半から六時四十五分までが夕食。七時から一時間はハーモニカ・バンドの練習。八時四十五分から十五分間は就寝のお祈り……)

(四) 孤児院の日課を暗誦しているうちに、ぼくはだんだん落ち着かなくなっていく。しみじみとして優しいなかのさまざまな音に囲まれているのだからのんびりできそうなものの、かえっていらいらしてくるのだった。生まれたときからおりの中で育ったライオンかなにかがいきなり外に放たれてかえってうるたえるように、ぼくも時間のおりの中から急に外へ連れ出されとまどつていたのだ。

立ってみたりすわってみたり、表へ出たり裏へまわったりしながら、夕餉のできあがるのを待った。

店の網戸を引く音がして、それと同時に蚊やりの匂いが家中にただよいだした。

「さあ、台所のお膳の前にすわって」祖母がぼくらに声をかけながら店の方へ歩いて行った。

すぐに祖母がもどってきた。

「叔父さんを待たなくてもいいよ」祖母が茶わんにご飯をよそいだした。

「叔父さんは後でたべるっていつているから」

65 「どうかしたの？」

「どうもしないよ。店をいちいち閉めたりするのが面倒なんだろうねえ。それにいまはあんまりたべたくないそうだよ」

お茶は冷やし汁だった。青豆やなすなどのすまし汁を常時 a チョゾウしてある氷で冷やした食べ物で町の名物だった。

「おや、変な茶わんの持ち方だこと」しばらく弟の手もとを見ていた祖母が言った。弟は茶わんを左手の親指、人さし指、中指の二本でつまむように持っていた。

70 「孤児院流なんだ」いそがしく口を動かしている弟に代わってぼくが説明した。

「孤児院ではご飯茶わんもお汁茶わんも、それからお茶を盛る皿も、とにかく食器はみんな金物なんだ。だから熱いご飯やお汁を盛ると、食器も熱くなって持てなくなる。でも、弟のようにすればなんとか持てる。つまり生活の智慧……」

「どうして食器は金物なの？」

「瀬戸物はこわれるからだよ」

75 祖母はしばらくはしを宙に止めたまま、なにか考えていた。それからため息を一つついて、

「孤児院の先生方も」苦労さまだけど、子どもたちも大変だねえ」とつけ物のなすをかんだ。

「……」ちそうさま(五) 弟がおひつを横目でにらみながら小声ではしを置いた。

「もうおしまい？ おなかいっぱいになったの」

80 弟はだまっていたままだ。ぼくは時間のたがが外れたので面くらったが、弟は孤児院のたがを外せないで困っているようだった。ぼくは弟に手本を示すつもりで大声で、おかわりと言ひ、茶わんを祖母に差し出した。弟は一度置いたはしをまた取って、小声で、ぼくもと言った。孤児院の飯は盛り切りだった。弟はその流儀が祖母のところでも行われていると考えて一膳だけではしを置いたのにちがいがなかった。

「ぼつちやのところは薬屋さんなんだよ。腹痛の薬は山ほどある。だからおなかの痛くなるほどたべてごらん」

85 弟はその通りにした。そしてお腹が痛くなつて仏間のとなりの座敷に横になった。祖母は弟に蚊帳をかぶせ、つり手を四隅のかぎにかけていった。ぼくは蚊帳をひろげるのを手伝った。蚊帳の匂いをかいだとき、ぼくは不意に、ああ、これは孤児院にないい匂いだ、これが(六) 家庭の匂いだったのだな、と思った。思ったときから、夕方以来の妙にいらついていた気分が消えうせて、どこか知らないがおさまるべきところへ気持ちが無事におさまったという感じがした。

ぼくは座敷の隅の机の前にどっかりとすわってトランクをしばっていた細ひもをほどいた。(七) 持ってきた本を机に並べて、座敷を自分の部屋らしくしようと思ったのだ。

90 ≪A≫ そのトランクは死んだ父さんのだろう」祖母がトランクの横にすわった。

「よくおぼえているんだなあ」

「わたしが買ってやったんだもの」祖母はトランクを指でなでていた。

「死んだ父さんが東京の学校へ出かけていったときだから、三十年ほど前のことかしらね」トランクをなでていた指を、祖母はこんどは折りはじめた。

95 「正しくは三十一年前だねえ」

「もうすぐお祭りだね」ぼくは太鼓の聞こえてくる方を指さした。

「そう、あと七日でお祭り」

「ぼくたち、祭りまで居ていい？」

ほんのわずかの間だが祖母は返事をためらっていた。

100 「だめかな、やつぱり」

「いいよ」

返事をためらったことをはじているような強い口調だった。

105

「おまえたちはわたしの長男の子どもたちだもの、本当ならおまえがこの家をつぐべきなのだよ。大いばりでいいよ」
この祖母の言葉で勇気がついて、当分言わないでおこうと思っていたあのことを口に出す決心が出た。
「ばっちゃん、お願いがあります」

急にぼくが正坐したので祖母がおどろいた眼をした。

「母が立ち直ってぼくと弟を引き取ることができるようになるまで、ぼくたちをここへ置いてください」

「……でも高校はどうするの」

110

「この町の高校でいいんだ。店の手伝いでもなんでもするから」

祖母はぼくと弟をかわるがわるながめ、やがて膝に腕を乗せて前かがみになった。

「孤児院はいやなかね、やはり」

「あそこに居るしかないと思えばちつともいやなところじゃないよ。先生もよくしてくれるし、学校へも行けるし、友だちもいるしね」

「そりやそうだねえ。文句を言ったらばちが当たるものねえ」

115

「で、でも、ほかに行くあてが少しでもあつたら一秒でもがまんできようなところでもないんだ。ばっちゃん、考えといてください。お願いします」

店で戸じまりをする音がしはじめた。祖母はトランクのそばから腰を上げた。

「叔父さんの食事のしたくをしなくっちゃ。今のおまえの話はよく考えておくよ」

120

祖母が出て行った後、ぼくはしばらく机の前に、ぼんやりすわっていた。(八)この話をいつ切り出そうかとじつはぼくは迷っていたのに、それが思いがけずすらすらと口から出たので自分でもおどろいてしまったのだ。気が軽くなって、ひとりで笑い出したくなった。ぼくはその場におおむけに寝ころんで、ひよっとしたらぼくと弟が長い間寝起きすることになるかもしれない部屋をぐるりとながめまわした。そして何日ぐらいで、弟の孤児院流の茶わんの持ち方が直るだろうか考えた。弟は蚊帳の中でbギソク正しい寝息を立てている……。ぼくは蚊帳の中にはついていって、できるだけ大きく手足を伸ばして、あくびをした。縁側から小さな光がひとつ入ってきて、蚊帳の上にとまった。それは螢だった。

125

行く手示す 明けの星 / 船路示す 愛の星 / 空のかなたで 我ら守る……

孤児院で習った聖歌をつぶやいているうちに、光が暗くなって行き、ぼくはねむってしまった。

どれくらいたってからかわからないが、叔父の声で目を覚ました。螢がまだ蚊帳の上で光っていたから、どっちにしてもそう

長い間ではなかったことはたしかだった。

130

「……いいかい、母さん、おれは母さんが、親父が借金を残して死んだから学資が送れない、と言うから学校を中途でよしてここへもどってきたんだ……」叔父の声はふるえていた。

「店をついでくれないと食べては行かれないと母さんがたのむから試験を受けて店もついだ。借金をどうにかしておくれと母さんが泣きつくから必死で働いている。これだけ言うことをきけばじゅうぶんじゃないか。これ以上おれにどうしろというんだよ」

「大きな声を出さないでおくれ。あの子たちに聞こえるよ」

135

「とにかく母さんのたのみはもう願いさげだよ」叔父の声がすこし低まった。

「今年の暮れは裏の畑を手ばなさなくちゃ年が越せそうもないっていうのに、どうしてあの二人を引き取る余裕なんかあるんだ」祖父はだいぶ大きな借金を残したらしかった。それにしても裏の畑を手ばなすことになったら祖母の冷やし汁の味もずいぶん落ちるにちがいないと思った。冷やし汁に入れる野菜はもぎたてでないとおいしくないからだ。

「子ども二人ぐらいいどうにかなると思うんだけどねえ」

140

「そんなことを言うんなら母さんが店をやるんだな。この商売、どれだけもうけが薄いかわかんなくて知ってるはずだよ。とくにこないなじゃ売れるのはマキユロか正露丸だ。母さんと二人でくって行くのがかつつかつたぜ」

「でも長い間とはいわない。あの子たちの母親が立ち直るまででいいんだから」

「それがじつは一番腹が立つんだ」叔父の声は前よりも高くなった。

145

「あの二人の母親は親父の葬式にも顔を出さなかったような冷血じゃないか。そりやあの二人の母親は親父や母さんにいじめられたかもしれない。でも相手がこの世から消えちまったんだ。それ以上うらんでもはじまらないだろ。線香の一本もあげにくればいいじゃないか。向こうが親父を許さないのなら、そのことを今度はおれが許さない。おれはいやだよ。あの女の子どもの面倒など死んでも見ないよ」

「でもあの子たちはおまえのおいだろうが……」

箱膳のひっくり返る音がした。

150

「そんなにいうんなら、なにもかもたたき売って借金をはらい、余った金で母さんが養老院にでも入って、そこへあの二人を引き取ればいいんだ。おれはおれでひとりで勉強をやり直す」

叔父の廊下をける音が近づき、座敷の前を通ってその足音は店の二階へ消えた。

「B弟が聞いていなければいいな、と思いつながら、弟の様子をうかがうと、彼は大きく目を見開いて天井をにらんでいた。」

「……ぼくたちは孤児院に慣れてるけど、ばっちゃんは養老院は初めてだよ」弟はぼそぼそと口を動かした。

155

「そんなら慣れてる方が孤児院にもどった方がいいよ」
「そうだな」とぼくも答えた。

「ほかに行くあてがないとわかれれば、あそこはいいところなんだ」
蚊帳に張りついていた蛍はいつの間にか見えなくなっていた。つい今し方の叔父のあらい足音におどろいてにげだしたのだからとぼくは思った。

160

ぼくはそれから朝方まで天井をながめて過ごした。これからは祖母がきつと一番つらいだろう。「じつはそろそろ帰ってもらわなくちゃ……」といういやな言葉をいつ口に出したらいいかとそればかり考えていなくてはならないからだ。店の大時計が五時を打つのをいおに起き上がって、ぼくは祖母あてに書き置きを記した。ごく簡単な文面だった。

「大事なことを忘れていました。今夜、ぼくら孤児院のハーモニカ・バンドはcエンソウをしなくてはならないのです。そのために急いで出発することになりました。ぼっちゃ、お元気で」

165

書き置きを机の上にのせてから、ぼくは弟をゆり起こした。

「これから孤児院に帰るんだ」

弟はうなずいた。

「ぼっちゃや叔父さんが目を覚ますとまずい。どんなことがあっても大声を出すなよ」

「いいよ」弟は小声で言って起き上がった。

170

ぼくらはトランクとボストンバッグを持って裏口から外へ出た。裏の畑にはもう朝日がかつと照りつけていた。足音をしのばせて庭先へまわった。

《Cギーツ！ギーツ！》

と大きな声で蟬が鳴いている。あまり大きな声なので思わず足がとまった。蟬の声は赤松の幹のあたりでしていた。近づいて見ると、透明なハネを持った赤褐色の大蟬だった。幹に頭を下に向けてしがみついている。

175

「でかいなあ」弟が嘆声をあげた。

「あんなにでかいのは油蟬かな。ちがう、熊蟬だ……」

「大きな声を出すんじゃない」ぼくはくちびるに右の人さし指を当ててみせて、「それからあいつは油蟬でも熊蟬でもないぜ」

「じゃなに？」

「エゾ蟬。とんな蟬さ」

180

「とんま？ どうして？」

「いきなり大声を出すたびびっくりして飛び出す。そこまではいいけど、さかさにとまっているから、地面に衝突してしまうんだ」
「……それで？」

「気絶しているところをつかまえる。それだけのことさ。ぼくなんか前にずいぶんつかまえたな。おまえにもずいぶんくれてやったじゃないか」

185

「おぼえてないや」

「たいてい山の松林にいるんだけどね、あいつめずらしく降りてきたんだぜ」

弟はボストンバッグを地面に置いた。

「よし、つかまえちゃおう。大きな声をあげればいいんだね？」

そうさ、とうなずきかけて、ぼくはあわてて弟の口を手でふさいだ。

190

「ぼっちゃや叔父さんが目を覚ましちまう」

弟はなにかもごもご口を動かした。きつと不平を言っているにちがいがなかった。そこでぼくは弟の耳に口を寄せてささやいた。「たしか今度の日曜日に、市の昆虫dサイシュウ同好会とかいうところのおじさんたちが孤児院に来ることになってたろう。あのおじさんたちがきつとこのとんな蟬のいるところへ連れてってくれると思うよ。だからこいつは見のがしてやろう」

弟がかすかにうんと首をふったのでぼくは彼の口から手をはなした。それからぼくらはエゾ蟬の鳴き声にせきたてられるようにして通用門の方へ歩いて行行った。《

195

(井上ひさし「あくる朝の蟬」より)

(語注) * 1 狼狽：あわてること

* 2 孤児院：キリスト教の教会がめぐまれない子供たちの生活のめんどろを見ている施設

* 3 夕餉：夕食

* 4 蚊やり：蚊を追いはらうためにたくけむり

* 5 おひつ：たきたてのご飯を入れておくもの

* 6 たがが外れる：制約がなくなること

* 7 蚊帳：蚊を防ぐために部屋につるす、あみ状のおおい

* 8 養老院：老人ホーム

* 9 とんま：間のぬけたさま

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 ――線 a 「チョゾウ」(67行目)、b 「キソク」(123行目)、c 「エンソウ」(163行目)、d 「サイシユウ」(192行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 ――線(一)「すこしずつ近づいてくる三年ぶりの赤松は……かつてのりりしきには欠けていた」(3～4行目)とありますが、「赤松」のほかに、「祖母」の家の今の状態が表れている表現があります。それが表れた一続きの二文を、本文の33行目までからぬき出し、最初の五字で答えなさい。

三 ――線(二)「三年前頃から町を出るすこし前、叔父は東京の私大に入学した。順調に行っているならもう四年のはずだった」(19行目)とありますが、「東京の私大」に通っているはずの「叔父」がこの家にいるのはなぜですか。本文を最後まで読んでから答えなさい。

四 ――線(三)「縁側に腰を下ろし……なくカナカナ」(48～50行目)とありますが、「いろんな音」の言いかえにあたる表現を二十字でそのままぬき出して答えなさい。

五 ――線(四)「孤児院の日課を暗誦しているうちに、ぼくはだんだん落ち着かなくなっていくた」(55行目)とありますが、「ぼく」が「落ち着かなくなっていくた」のはなぜですか。自分の言葉で説明しなさい。

六 ――線(五)「弟がおひつを横目でにらみながら小声ではしを置いた」(77行目)とありますが、この表現から、「弟」について、どのようなことがわかりますか。「横目でにらみながら」「小声ではしを置いた」という部分に注目して、説明しなさい。

七 ――線(六)「家庭の匂い」(86行目)とありますが、「ぼく」はどのような点に「家庭の匂い」を感じていますか。三点示しなさい。

八 ――線(七)「持ってきた本を机に並べて、座敷を自分の部屋らしくしようと思ったのだ」(88～89行目)とありますが、「自分の部屋らしく」することは「ぼく」にとってどのような意味がありますか。説明しなさい。

九 ――《A》の部分(90～103行目)について、このときの「祖母」の心情の説明としてふさわしいものはどれですか。次のア～オの中から、ふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 死んだ息子との思い出がつまったトランクにふれることで、息子の子どもたちを家に置く決心が固まったが、ほんの少しの間暮らすことすら心配している彼らになかばあきれ、心配は無用だと念をおしている。

イ あまり日がたたないうちに帰ってもらいたいと思っていたが、死んだ息子に買ってやったトランクの思い出によって、息子の子どもたちへの愛情がわき起こってきたため、本心が表れないようにふるまっている。ウ トランクにさわることで死んでしまった息子と暮らした日々を思い出したのに、その子どもたち、少しの間でも自分の家についていいと伝えることを一瞬ためらった自分のふがいなさをぬぐいさるうとしている。

エ 「ぼく」が持ってきたトランクによって、今までの、決して楽ではなかった長い年月を思い出していたが、太鼓の音によって現実に取りもどされ、とつぜん言われた「ぼく」のお願いにびっくりし、とまどっている。オ この家におけるかどうかは「叔父」しだいなので、今は何とも言えないが、トランクの思い出から「ぼく」たちが長男の子どもであったことも改めて思われ、うそをついても彼らをはげまそうと必死になっている。

十 ――線(八)「この話をいつ切り出そうかとじつはぼくは迷っていたのに、それが思いがけずすらすらと口から出たので自分でもおどろいてしまったのだ」(119～120行目)とありますが、

(1)「ぼく」はなぜ「迷っていた」のですか。説明しなさい。

(2)「それが思いがけずすらすらと口から」出るようになったのはなぜですか。説明しなさい。

十一 ――《B》の部分(153～157行目)から、「ぼくと弟」がどのようなひととがらであることがわかりますか。説明しなさい。

十二 この作品における「ぼくと弟」の行動や心情について、作品を三つに分けて、説明しなさい。

十三 この作品では「蛭」や「蟬」が、重要な意味をもっています。

(1)……線(124行目)では「蛭」が「蚊帳の上にとまっ」ていますが、……線(158行目)では「蚊帳に張りついていた蛭はいつの間にか見えなくなっ」ています。作品の内容を考えたとき、「蛭」にはどのような意味があると考えられますか。説明しなさい。

(2)《C》の場面(172～195行目)で「エゾ蟬」が登場しますが、この作品で「エゾ蟬」にはどのような意味があると考えられますか。説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

